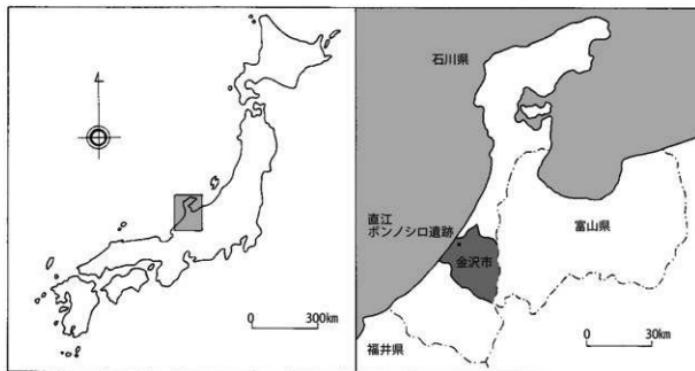


石川県 金沢市

直江ポンノシロ遺跡

—鞍月文化会館くらら建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



平成24年3月
(2012年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例　　言

1. 本書『直江ポンノシロ遺跡』は、石川県金沢市直江町地内に所在する直江ポンノシロ遺跡（新発見のため遺跡番号なし）の発掘調査を扱った報告書である。
2. 本調査は金沢市教育委員会生涯学習課による鞍月文化会館くらら建設工事に伴い、平成22年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会（会長　橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏）の指導の下で、向井裕知（文化財保護課主任主事）が担当した。
4. 本書の執筆及び編集、遺構の写真撮影は向井が担当し、遺物の写真は景山和也（文化財保護課主査）が撮影した。
5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 方位は全て座標北である。座標は世界測地系（第VII系）に基づき設定している。
 - (2) 各図の縮尺は、遺物は1/2・1/3・1/4・1/6・1/8、遺構は1/40・1/60・1/100が主であるが、各図に指示しているとおりである。
 - (3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、それぞれの本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
 - (4) 遺構名の略号は、S B＝掘立柱建物、S E＝井戸跡、S K＝土坑跡、S D＝溝・川跡、S X＝落ち込み・土器だまり跡などである。
 - (5) 土器については「壺」・「甕」・「高坏」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で、「壺形土器」などの略称である。
6. 本調査での出土遺物、記録資料は金沢市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
発掘日誌抄	1

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 検出遺構

第1節 概要	7
第2節 ピット・土坑	7
第3節 溝	7

第4章 出土遺物

第1節 概要	10
第2節 ピット・土坑	10
第3節 溝	10

第5章 総括	12
--------	----

遺構平面図	15
-------	----

写真図版	
------	--

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

直江ポンノシロ遺跡は、金沢市副都心北部直江土地区画整理事業（以下、直江土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査で見つかった遺跡である。

遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの経緯は以下のとおりである。

平成17年12月6日に区画整理組合の設立準備会より埋蔵文化財の調査依頼が提出された。平成18年4月11日には区画整理課より同様の依頼があり、耕作が終了した平成18年10月12日～同26日に試掘調査を実施した。この試掘調査によって、大半の対象地が終了し、直江北遺跡、直江中遺跡、直江西遺跡が確認されたが、一部未実施地区と詳細試掘調査が必要な箇所が残った。翌年の平成19年10月15日～同16日に試掘調査を実施し、本書にて報告する直江ポンノシロ遺跡が新たに見つかった。その翌年の平成20年10月14日～同15日の試掘調査で、直江西、直江ニシヤ、直江ポンノシロ、直江南の各遺跡の範囲が確定した。

試掘調査の結果、明らかになった遺跡に関して、街路や仮設水路等の工事によって遺跡が損壊もしくは損壊と同等の状態になる箇所について、平成19年度から順次発掘調査を実施している。

平成21年度に、直江ポンノシロ遺跡所在地にて公民館を建設する旨、金沢市教育委員会生涯学習課から連絡があり、工事によって遺跡が破壊される建物建築範囲について、生涯学習課で調査費用を予算化し、発掘調査を行うことになった。

第2節 発掘調査の経過

直江ポンノシロ遺跡は平成22年度に発掘調査、平成23年度に屋内整理を実施した。

平成22年11月18日に石川県教育委員会教育長あて「土木工事等のための発掘通知」を、同22日に「発掘調査報告」を提出し11月29日～12月24日まで現地発掘調査を実施した。また、出土品の屋内整理は平成23年10月3日～同年11月30日まで実施している。

【発掘日誌抄】

平成22年

11月29日 表土掘削開始（12/2まで）

12月2日 遺構検出開始（12/6まで）

12月10日 SK33～36掘削、撮影

12月13日 土坑・溝等掘削、繩文土器出土

12月17日 土坑・溝・ピット等掘削

12月19日 繩文時代遺構確認のために調査区北東部付近を再

検出、SX06（地山類似土からの繩文土器出土遺

構）掘削、撮影

12月21日 SX06・SK39等掘削、1/20層位図・1/100遺構略図作成

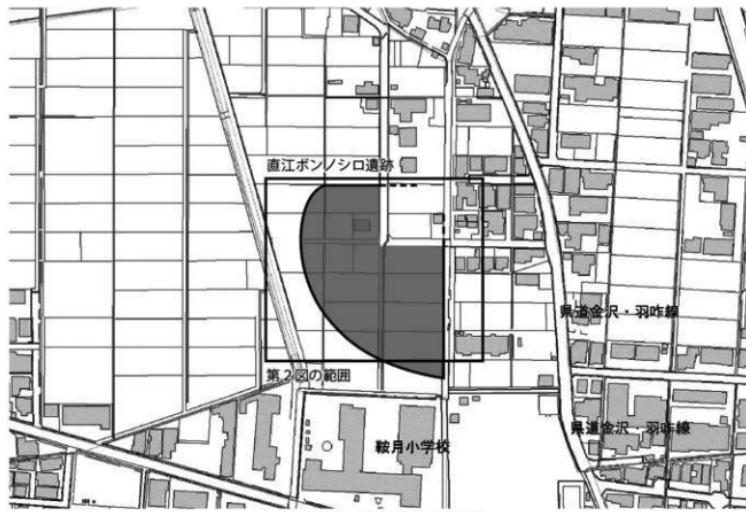
12月22日 航空測量実施、1/20層位図作成、機材等洗浄

12月24日 機材等収

平成23年

1月6日 調査区埋め戻し開始（1/8まで）

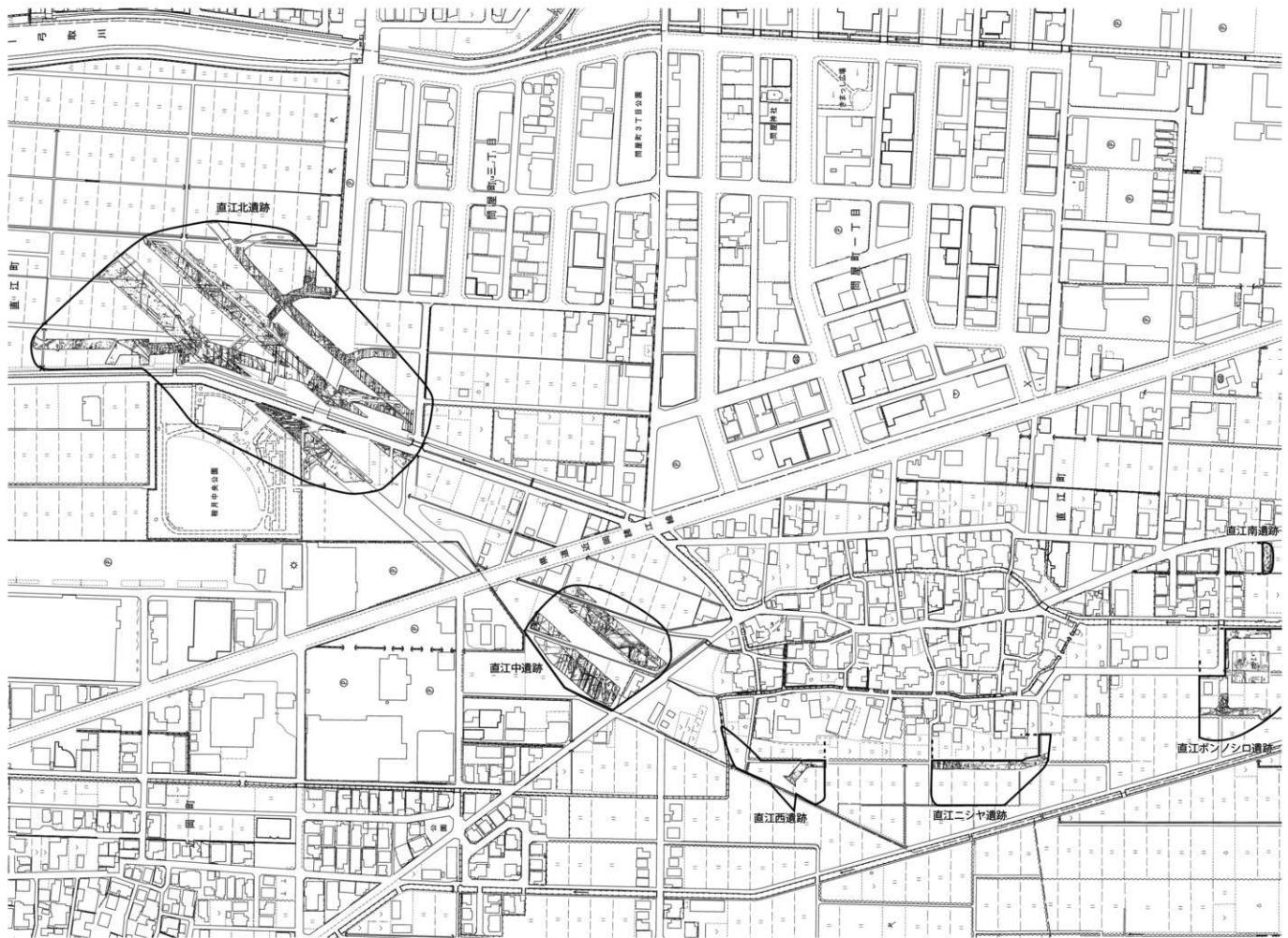
1月14日 現場廃棄物運搬・処分、調査完了



第1図 調査区の周辺 [S=1/3,000]



第2図 調査区位置図 [S=1/1,000]



第4図 直江遺跡群分布図 ($S=1/3,000$)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

直江ボンシロ遺跡は石川県金沢市直江町地内に所在する。石川県は本州日本海側のほぼ中央に位置している。北方は日本海に面し、南方は福井県、岐阜県、富山県と接する南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられる。金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する二大河川、浅野川と犀川が流れ、北側に位置する前者は河北潟へ、南側の後者は日本海へ注ぐ。市域の西部に展開する平野部では両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金剛川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

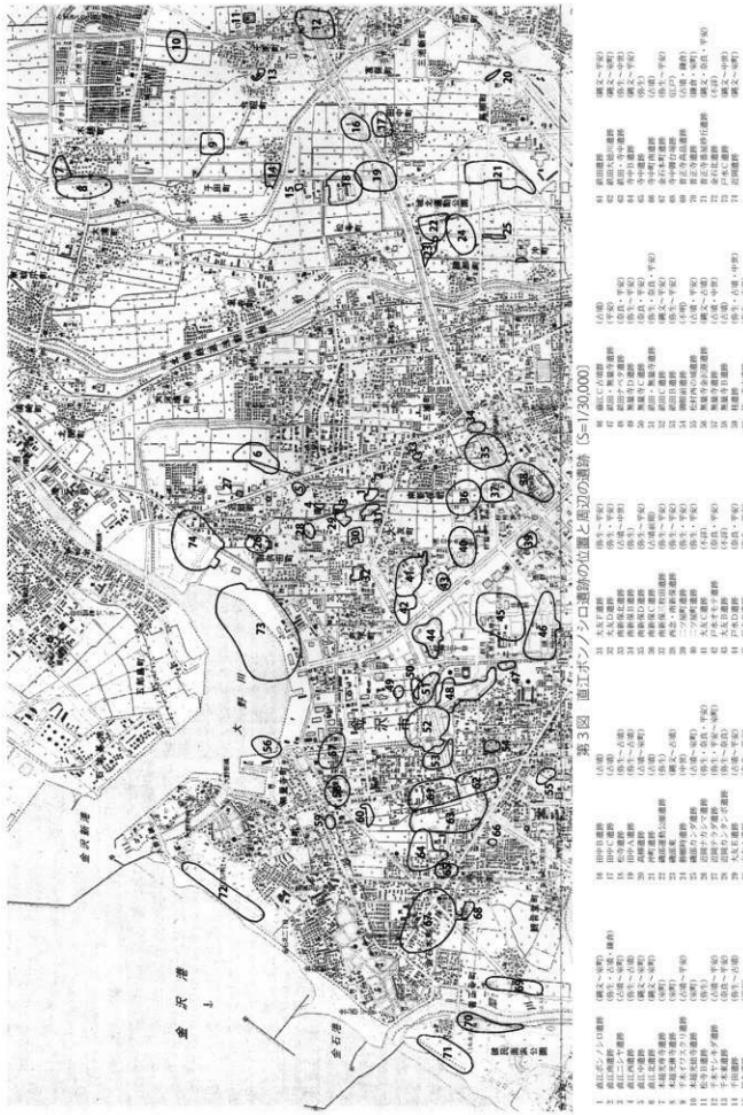
直江ボンシロ遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約3km内陸側に位置する。河北潟と大野川の後背湿地のため、土壌は強い粘性をもつ。近年は地下水の汲み上げ等に伴い地下水位が低下したが、古くは豊富な地下水の自噴地帯であった。また、大野川の旧河道や中州、自然堤防が島状に分布し、田舟で往来したというように、舟運が非常に重要な役割を果たしていた。

第2節 歴史的環境

直江町には本遺跡（縄文晩期、弥生末期、古墳前・中期、平安、鎌倉、室町）の他、直江南遺跡（弥生末期、古墳前期、鎌倉）、直江ニシヤ遺跡（古墳前期、平安、鎌倉、室町）、直江西遺跡（弥生末～古墳中期）、直江中遺跡（縄文晩期、古墳前期、平安、鎌倉、室町）、直江北遺跡（縄文晩期、弥生中～末期、古墳前・中期、平安、鎌倉、室町）が分布する。

本遺跡周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、まず縄文時代には本遺跡や直江中遺跡で晩期の土器が地山類似土中から出土しており、同北遺跡では穴や川が確認できる。近岡遺跡では昭和15年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。弥生時代には戸水B遺跡、戸水C遺跡、藤江C遺跡などで前期からの遺物が確認されており、直江北遺跡においては中期から遺物が確認されている。後・終末期になると遺跡の数は多くなり、建物や墓などが多くみつかっている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、周辺では藤江B遺跡や畠田・寺中遺跡で確認できる。直江北遺跡では古墳時代前期から中期にかけての集落跡が見つかっており、掘立柱建物や布堀建物、井戸、溝などが見つかっている。奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、戸水C遺跡や戸水大西遺跡、畠田遺跡群といった港湾施設や官衙に関係した遺跡が出現する。また、近年の調査で大友E遺跡から大型掘立柱建物や多数の墨書き土器などが見つかっている。鎌倉・室町時代は、周辺に遺跡が広く分布しており、畠田・寺中遺跡では、堀で囲繞された方二町×一町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡では銭の出納に関わる付札木簡が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津渡関連遺跡と評価されている。近岡遺跡の所在する近岡町には林系の近岡九郎利明が12世紀末～13世紀初頭に館を構えたと伝えられている。このように、遺跡周辺は古代・中世期の活動が活発な地域であり、倉月荘内に比定される直江町においても本遺跡他、複数の遺跡で活動が認められる。「直江」の初見は、『天文日記』天文五年（1536）五月二日条に「加州直江村新右衛門尉」として見える。本願寺証如によるもので、一向一揆が盛んであった当地域との関係が垣間見え、当該期の遺物も出土している。なお、直江町近郊の木越には木越三光と称す一向一揆の有力寺院が所在した。

今回の調査区の一部は墓地跡地を含んでおり、そこからは近世に遡る墓が検出されている。



第3章 検出遺構

第1節 概要

直江ポンノシロ遺跡の調査では、ピット、土坑、墓坑、溝、川などが検出されているが、本書が対象としている調査区ではピット、土坑、溝が見つかっている。また、縄文時代晩期後葉の土器がやや汚れた地山質土から出土しており、SXとして遺構名を付した。

なお、本遺跡は金沢市湖都心北部直江土地区画整理事業に起因する調査も平成21、22年度と実施しており、同遺跡内での遺構番号の重複を避けるために、連番としている。そのため、遺構番号は途中から付している。

第2節 ピット・土坑

S K33（第6図） SK33は不定形を呈する浅い落ち込み状の遺構で、底面の凹凸が激しい。覆土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。

S K34（第6図） 略楕円形を呈する浅い落ち込み状の遺構で、覆土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

S K35・36（第6図） SK35は2基の土坑になるかもしれないが、掘削段階で明確な差異がなかったので、1つの土坑として扱った。また、SK36についても重複しており、覆土も同じであったが、位置がやや異なったので別遺構としている。共にSK34と同じにぶい黄褐色シルトが覆土であり、遺物は出土していない。

S K38・40（第6図） 共に不定形を呈する浅い落ち込みである。覆土は類似しており、灰黄褐色シルトと灰黄色シルトである。遺構の切り合いは確認できていない。SK38からは弥生土器もしくは古墳時代土師器の土器片や平安時代の須恵器が、SK40からは平安時代の須恵器片が出土している。

S K39（第6図） 略円形を呈する土坑である。覆土は暗灰黄色シルトを主体とする。須恵器の甕片が出土している。

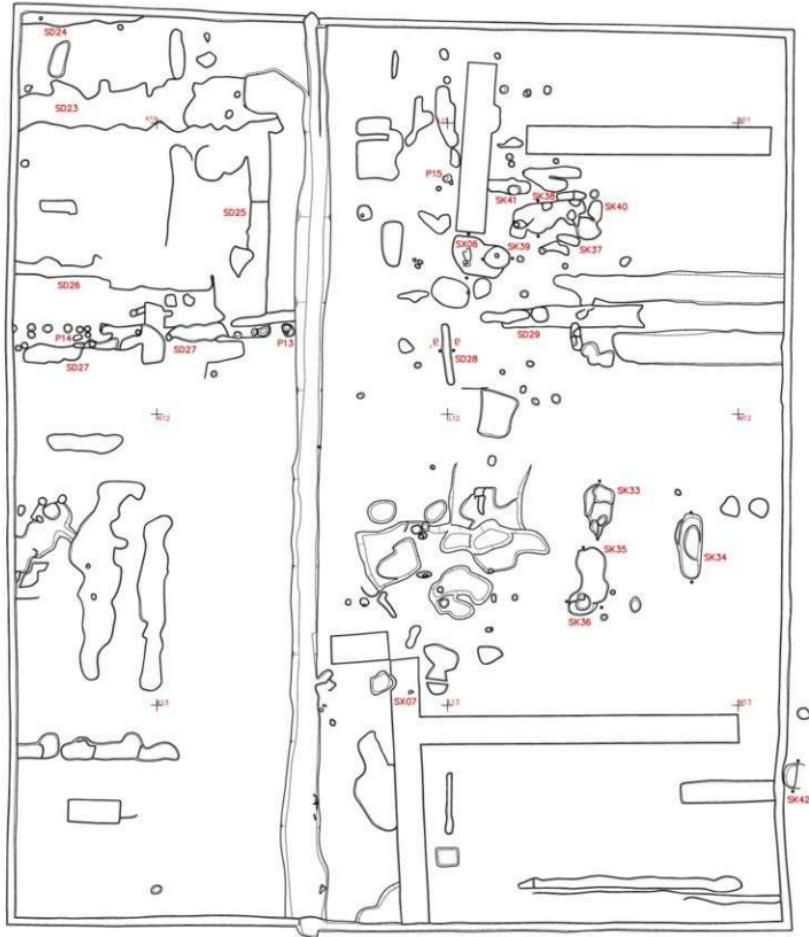
S K42（第6図） 調査区の東端に位置しており、全形を確認できていないが、検出範囲からの判断では略円形を呈するように見える。覆土は褐灰色シルトを主体とする。土師器片や龍泉窯系青磁碗片が出土している。

S X06（第6図） 遺構検出時に縄文土器が露出した。周辺は地山土がやや汚れたような色調を呈しているが、掘方などの遺構プランは明確ではなかった。そのような地山に類似した土の中から縄文土器が横倒しになった状況で出土したが、半分以上は削平によって失われていた。

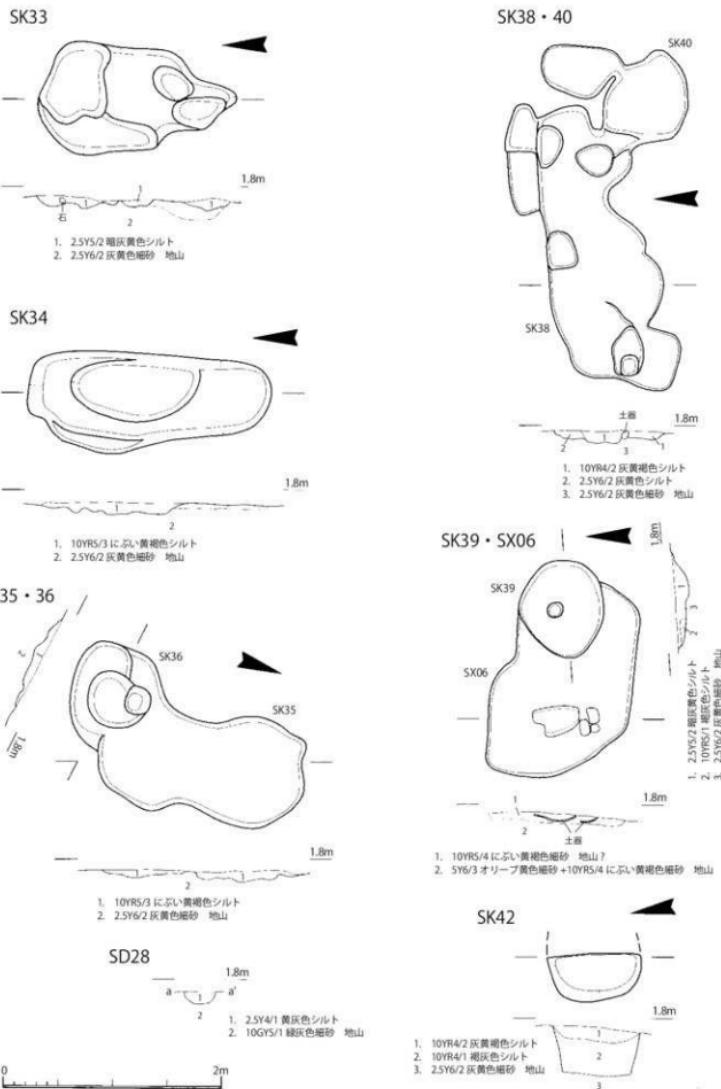
S X07（第5図） SX06同様に地山類似土から縄文土器が出土している。

第3節 溝

S D28（第6図） 調査区中央付近や北寄りに所在する南北溝である。延長は約2mと短い。覆土は黄灰色シルトである。遺物は出土していない。なお、複数条の溝を検出しているが、近代以降の耕作に伴うものが大半であり、確実に中世以前に遡るものは未検出である。



第5図 遺構全体図 [S=1/150]



第6図 SK33～36、38～40、42、SX06、SD28 [S=1/40]

第4章 出土遺物

第1節 概要

直江ポンノシロ遺跡の調査では、縄文時代晚期・弥生時代後期・終末期、古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代以降と多種多様な遺物が出土している。本書で対象とする調査区からは、縄文時代晚期・弥生時代・平安時代・鎌倉時代から室町時代の遺物が出土しているが、周辺の調査区と比べると遺物量は少なかった。

なお、法量や調整の概略などは遺物観察表をご参照願いたい。

第2節 ピット・土坑

S K37 (第7図) 1の石器剥片が出土している。鉄石英であり、打撃によるフィッシャーが数多く認められる。

S K38 (第7図) 2の須恵器の長頸瓶の口縁部から頸部付近が出土している。図の下部には肩が張った球形の胴部が想定される。平安時代の所産であろう。

S K40 (第7図) 3の須恵器壺が出土している。平安時代前半の所産であろう。

S X06 (第7図) 4の繩文土器深鉢が出土している。外面全体的に横方向の条痕を施しており、内面は横方向のミガキ調整を施すが、条痕状の調整痕が見える箇所があるので、条痕調整の後、ミガキ調整を行っている可能性が指摘できる。口縁部は上方でやや外反しており、端部は面取りする。条痕および器形から中屋2式頃の所産と考えられる。

S X07 (第7図) 5の繩文土器深鉢が出土している。外面全体的に横方向および斜め方向の条痕を施すが、上方の条痕はやや見えにくくなっている。ナデ調整を施している可能性がある。内面は横方向のミガキ調整を施す。口縁部はハの字状に広がり、やや凹凸のある口縁端部に至る。外面にはススが付着している。条痕および器形から下野式頃の所産と考えられる。

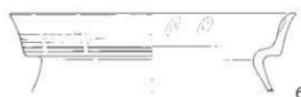
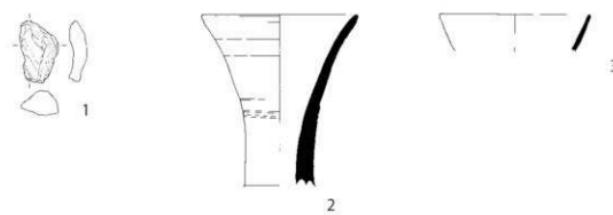
第3節 溝

S D25 (第7図) 6が出土している。有段の口縁部外面に擬凹線が施されており、内面には指痕痕が見える。弥生時代終末期の甕の口縁部である。

第1表 遺物観察表

(単位:mm)

No.	遺 構 区	地 区	種 類	器 種	口 (裏)	底 (裏)	基 厚 (往)	外 面 調整	内 面 調整	底 部 調整	釉 色 (裏)	外 面 (裏) 色 調	内 面 (裏) 色 調	硬 度	砂	骨	赤	焼 成	備 考	実 測 No.
1	SK37	M11	石製品	剥片	43	26	17.0												20.0g 鉄石英	T571
2	SK38	M11	須恵器	長頸壺	108			ナデ	ナデ		灰	灰			並			並		T572
3	SK40	M11	須恵器	壺	104			ナデ	ナデ		灰白	灰白	少	並				並		T570
4	SX06	M11	繩文	深鉢	274			条痕	ミガキ		淡褐色	淡褐色	並	多		少	並			T575
5	SX07	L12	繩文	深鉢	358			条痕	ミガキ		淡褐色	淡褐色		並		少	並			T574
6	SD25	L11	弥生	甕	196			マメツ	マメツ		淡黃褐色	淡褐色		多		多	並			T573



0 15cm

第7図 SK37(1)、38(2)、40(3)、SX06(4)、07(5)、SD25(6)出土遺物 [S=1/3]

第5章 総 括

本報告が対象とする調査では、縄文時代晚期や弥生時代、平安時代、鎌倉時代～室町時代の造構や遺物が見つかっている。ただし、直江ポンノシロ遺跡の全調査で見つかった造構・遺物の一部に過ぎないので、本遺跡を理解するためには他の調査区の調査成果を踏まえる必要がある。そこで、区画整理事業に起因する調査の成果（金沢市2012）を踏まえて、今回の調査について考えてみたい。

本報告による調査区の東側に位置する調査区では、調査区を大きく占める川跡（SD02）から、弥生時代から中世までの遺物が出土している（第8・9図）。SD02及び近代河川（用水）のSD01は調査区東側を流れる鞍月用水沿いで検出しているが、弥生時代後半～古墳時代（第8図上段）や奈良・平安時代（第8図下段）、鎌倉・室町時代（第9図上段）の遺物が出土しており、弥生土器や古墳時代の土師器、須恵器、奈良・平安時代の土師器や須恵器、縁軸陶器、灰釉陶器、墨書き土器、鎌倉・室町時代の土師器皿や珠洲焼、加賀焼、越前焼、瓦質土器、古瀬戸、白磁、青磁などのほか、漆器や木製品なども出土している。川は重複しており、調査区内では明治頃の川までを確認しているが、徐々に流路が整備されて、調査区に隣接する現在の鞍月用水へと姿を変えたものと考えられる。

また西側に位置する調査区では、弥生時代後半から古墳時代や奈良・平安時代の溝・川と共に、直江町の旧墓地を含むことから、江戸時代以降の墓地が多く検出されている。

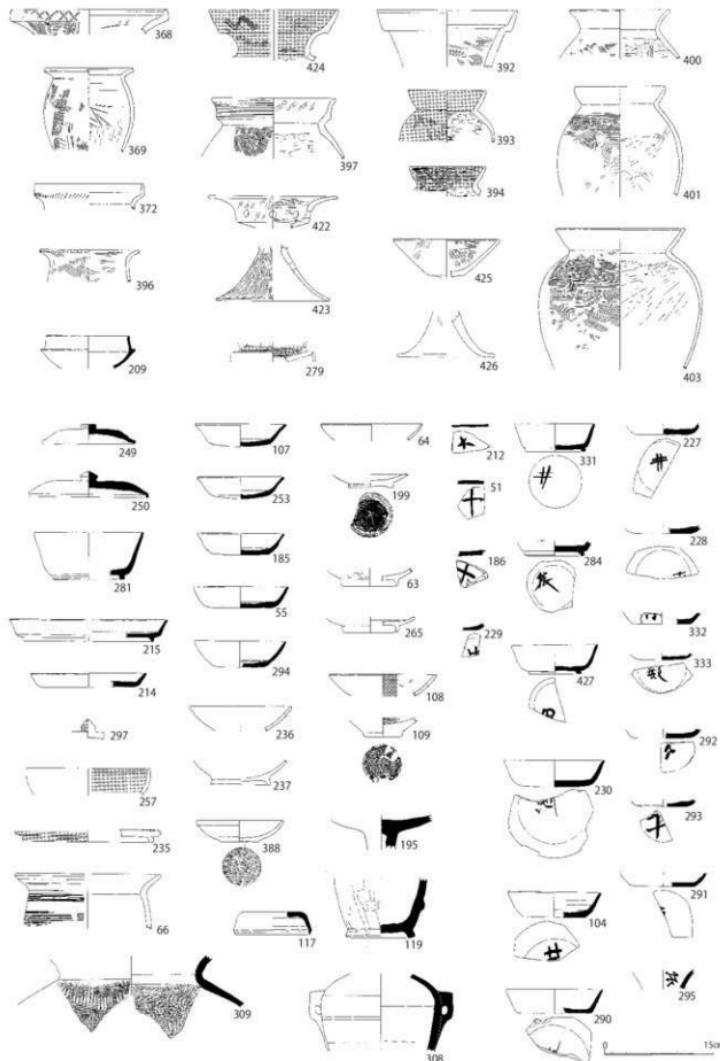
弥生時代後半から古墳時代の造構では、川と考えられる大きな落ち込みが検出されたが、大半が江戸から明治頃にかけての川もしくは用水によって消失していた。また、直線的に伸びる大きな溝が検出されたが、これも江戸時代以降の墓地や明治頃の溝により大きく改変を受けている。他、奈良・平安時代の遺物が近世・近代造構から比較的多く出土しているが、当該期の造構はあまり見つかず、これも江戸時代以降に大きく改変を受けたものと考えられる。その他、鎌倉時代や室町時代の陶磁器などが出土しているが、同時代の明確な造構は不明であった。

江戸時代の墓では鍋被り葬という特殊な墓制を示す造構が検出された（第9図下段）。埋葬時に頭部に鍋を被せるもので、特殊な病気に感染した方が亡くなった場合や盆中に亡くなった場合に用いられる事例が出土人骨の研究や伝承調査から指摘されている。本遺跡の事例が何に起因するのかは明らかにできないが、東日本で中世以降多く確認されている鍋被り葬の事例が、これまでほとんど事例が確認されていない日本海側の北陸で見つかったことは、鍋被り葬という墓制の伝播や加賀藩政下の農村の文化や葬送儀礼を考える上で、貴重な情報となろう。

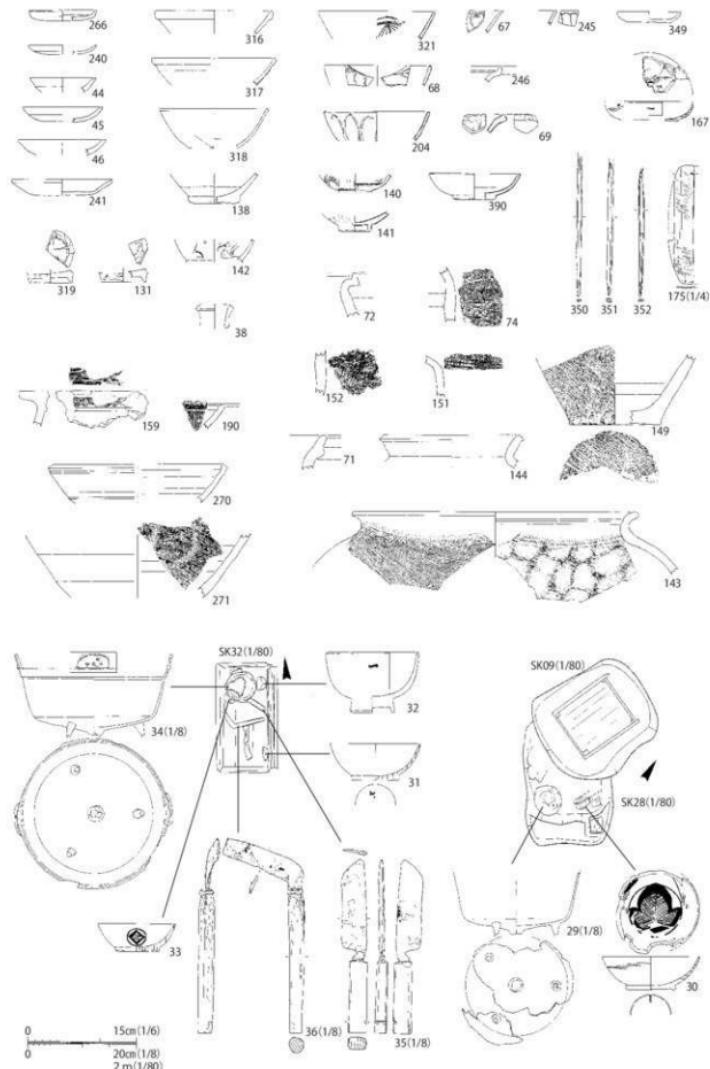
このように、本報告による調査区の東西では、弥生時代後半以降の造構、遺物が多く見つかっているが、建物跡が未検出である。西側の調査区については近世・近代以降の流路によって、古い時代の造構が失われている可能性はあるが、本遺跡で建物城が想定されるのは、西側調査区の川と東側調査区の川や溝という低地に挟まれた本調査区周辺が該当しよう。しかしながら、本報告によるように、目立った造構は検出されず、造構密度は希薄であった。調査で検出された近世・近代の流路覆土から弥生時代以来の遺物が多数見つかっていることから、流路を埋める際や耕地整理による削平が原因で、本来あるはずの造構の大半が失われている可能性は十分に考えられる。まだ未調査の箇所もあるので、一つの可能性として指摘しておきたい。以上、本遺跡は縄文時代晚期後葉以来の遺跡であり、弥生時代後半から断続的に集落域が展開したものと考えられる。

【引用・参考文献】

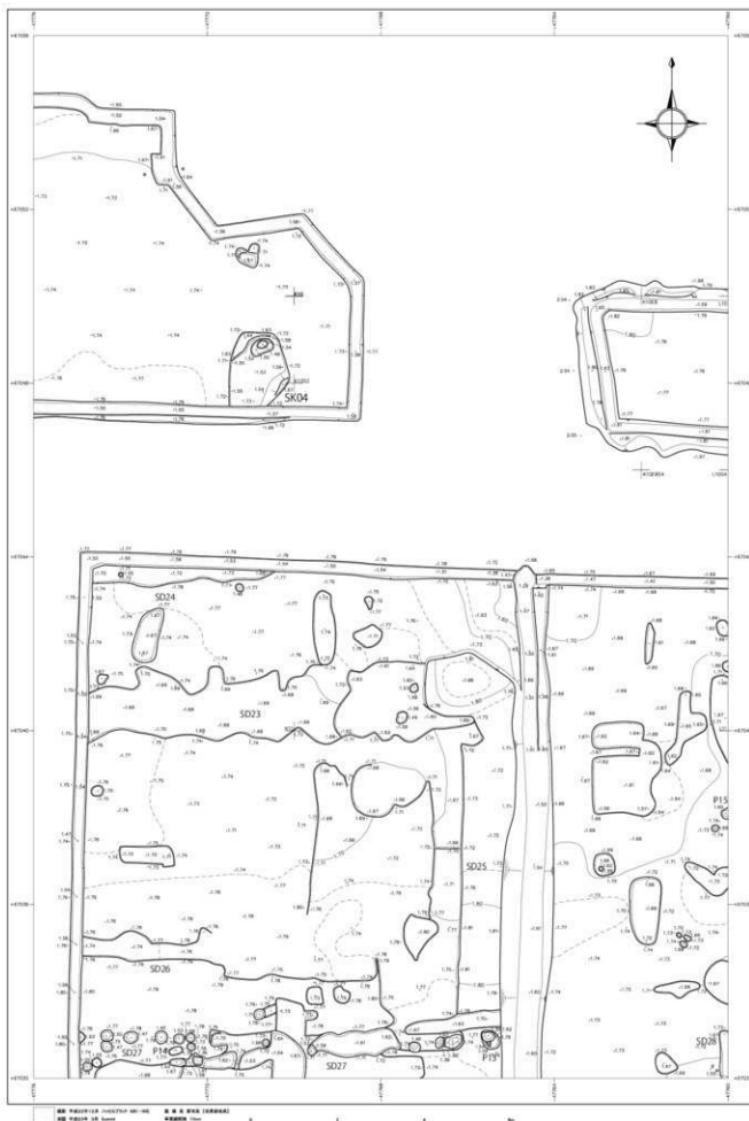
金沢市 2012『直江南遺跡・直江ポンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』



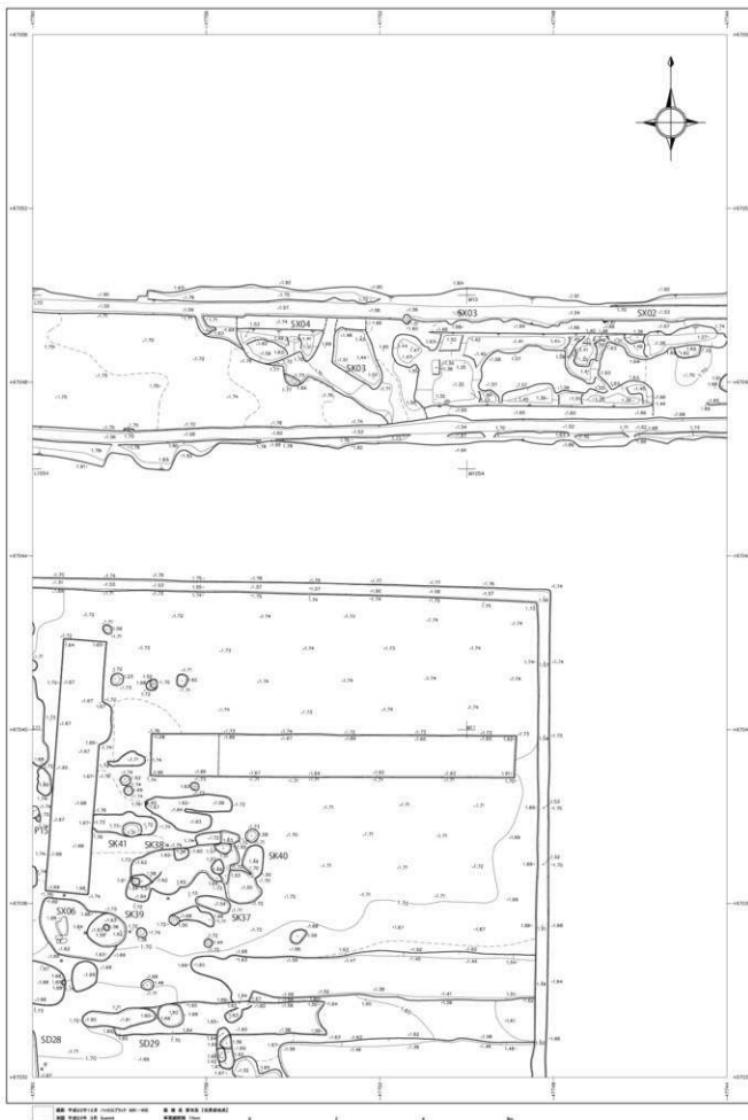
第8図 直江ポン／シロ遺跡出土遺物(1)〔区画整理地内出土、金沢市2012より転載・改変、S=1/6〕
※図中の番号は金沢市2012に対応



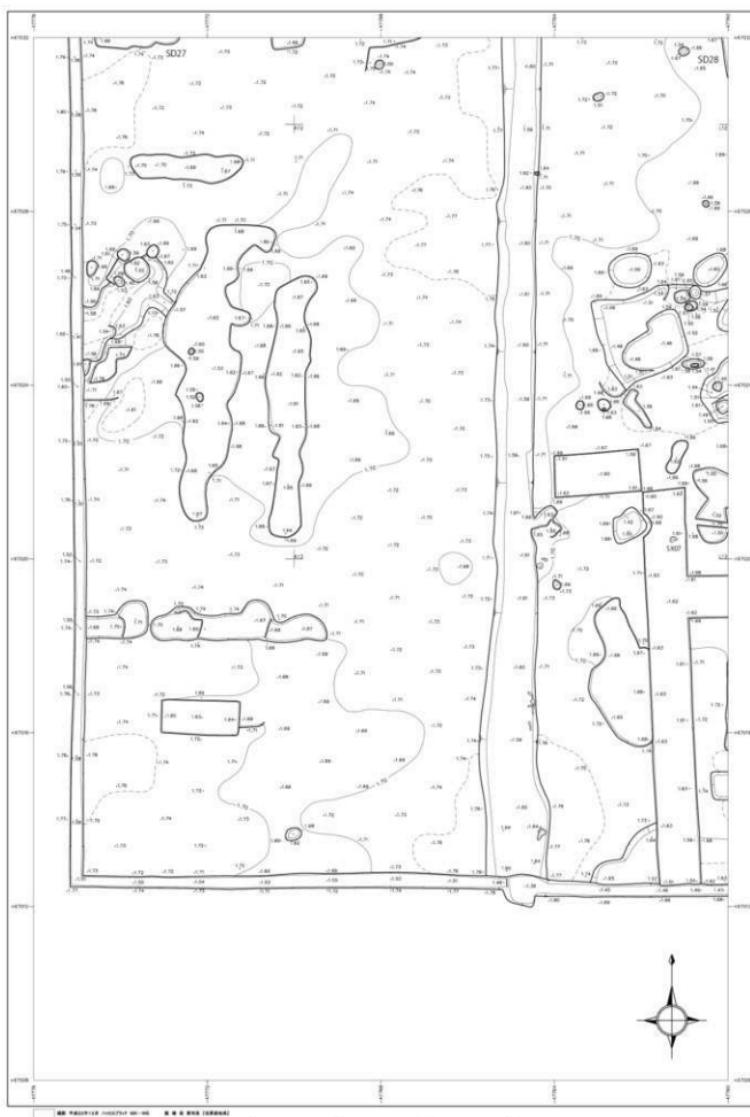
第9図 直江ボンノシロ遺跡出土遺物(2)〔区画整理地内出土、金沢市2012より転載・改変、S=1/6・8・80〕
※図中の番号は金沢市2012に対応



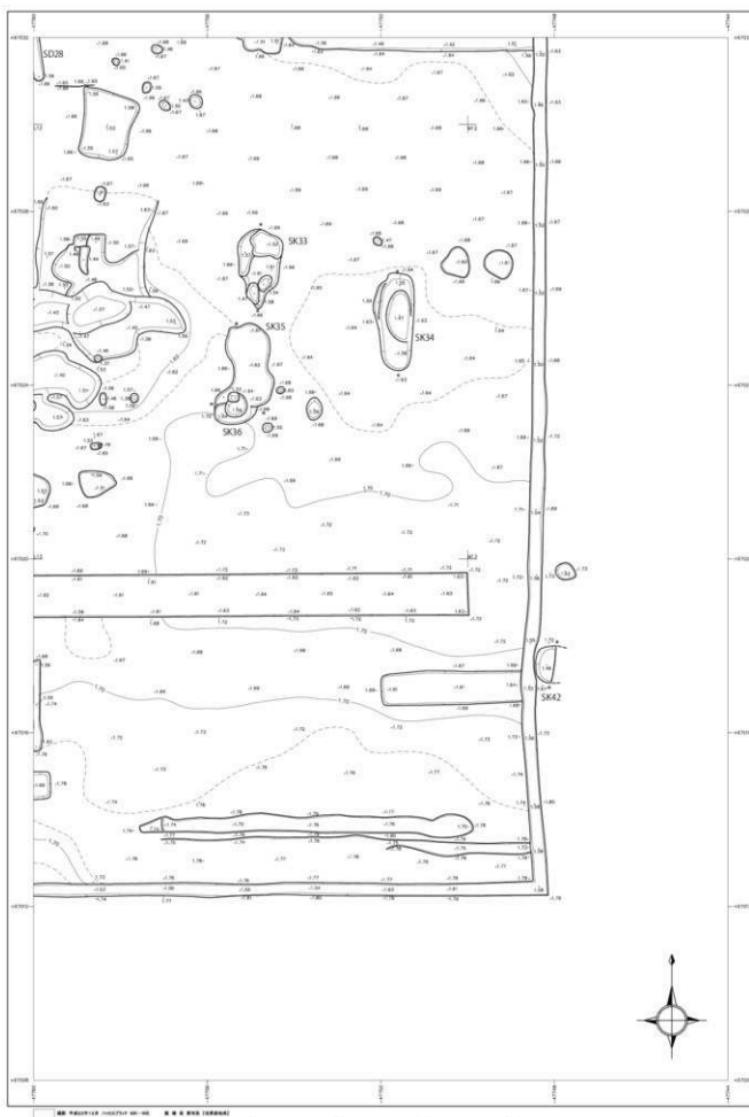
第10図 遺構平面図1 (S=1/100)



第11図 遺構平面図2 (S=1/100)



第12図 遺構平面図3 (S=1/100)



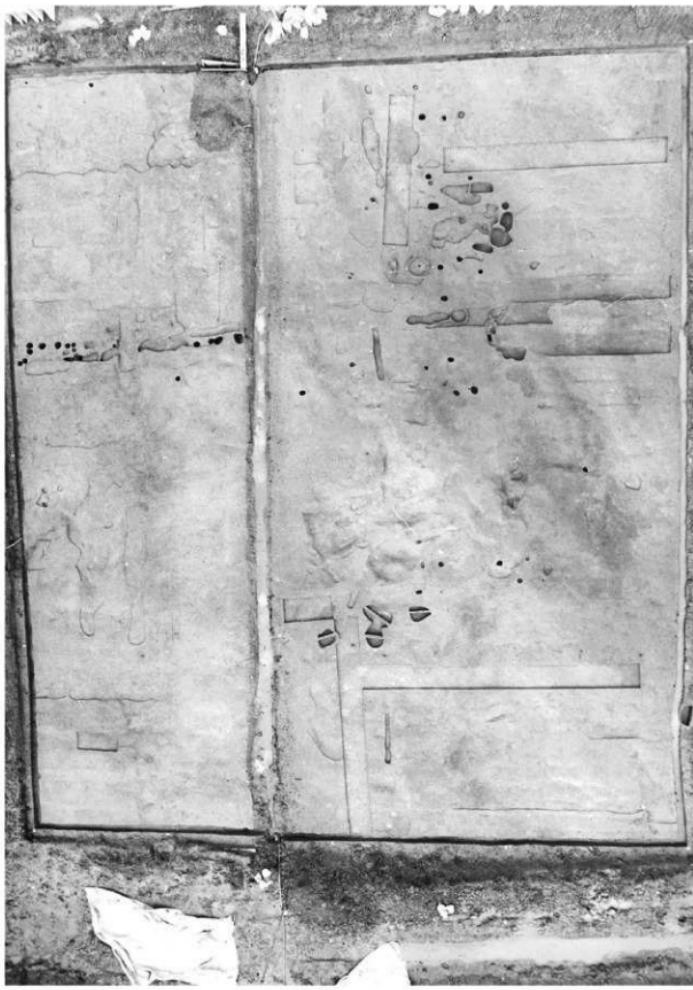
第13図 遺構平面図4 (S=1/100)



調査区全景（オルソン画像、S=1/500、他調査区を含む）



調査区遠景



調査区全景



SK33



SK34



SK36



SK38



SK39



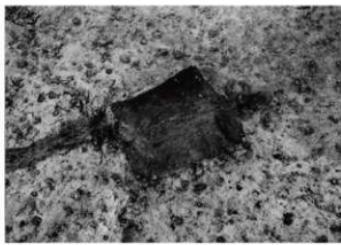
SK42



SX06



SX06



SX07



SD28



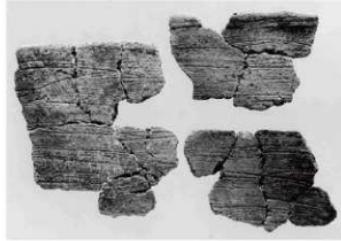
1



2



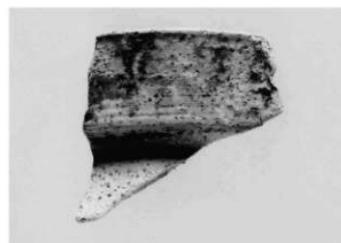
3



4



5



6

報告書抄録

直江ポンノシロ遺跡

(『金沢市文化財紀要』278)

城月文化会館くらら建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年3月30日発行

(2012)

編集 金 沢 市
発行 金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374
石川県金沢市上安原南60番
TEL (076) 269-2451
印刷 カンダ印刷株式会社